

第 168 回例会山行記録 (谷川岳)

8 回豊田寿夫、28 回大竹口誠治

期間 : 2012 年 10 月 12 日 (土) - 14 日 (月)

メンバー : 前田精三、東郷賢治、田子秀夫、豊田寿夫、田中信行、岡市敏治、有馬誠、
居谷千春、居谷有里子、中川勝八郎、大竹口誠治、岩澤貴士

今年は高木正孝先生(旧制成蹊高校昭和 8/1933 年卒・踏高会員)の生誕 100 年にあたり神戸大学山岳部長として指導を受けた ACKU の OB が、先生が在学中に建設に尽力されたこの虹芝寮で記念山行を持った。

1. 関連行事

1) 先生の登山に関するレクチャー (10 月 12 日夜)

生前、先生は自分の登山の原点は谷川にありと語られた。先生の昭和 1 桁代後半の一の倉滝沢開拓の歴史と昭和 8/1933 年 12 月 28-29 日の一の倉 2 ルンゼ→ザッテルを越えて滝沢 D ルンゼ→国境稜線への積雪期初登攀をふりかえり、第 2 次大戦末期 1944 年 8 月のスイスでのシャイデック・ヴェッターホルン(Schedigg Wetterhorn)北西壁につながる登攀歴をあらためて確認した。

2) 10 月 13 日は各パーティに分かれ谷川岳の集中登山を行った。1 パーティは芝倉沢に入り中芝新道を登った。1933 年 12 月末の滝沢登高のあと、先生が一の倉岳を下って幽の沢を経て虹芝寮に帰られたルートであらためて辿った。別のパーティは天神尾根から谷川岳頂上に登り、オキノ耳から滝沢の初登ルートを見ようとしたが、悪天候のため確認出来なかった。

3) 1962 年 8 月南太平洋の調査旅行中に行方不明になられた先生の最後の谷川山行となったのは、“若い OB が谷川を知るには自分が開拓した“第 2 ルンゼからザッテル越え”のルートがよい”と OB・7 人と登った 1961 年 8 月の滝沢で、同行したメンバーがその時のことを伝え思い出を語った。また、山岳部の合宿への最後の参加は 1962 年 3 月の新潟県巻機山の春山合宿であったが、その時のメンバー 1 人は 13 日に蓬峠から同山を見ると共に、今回の虹芝寮の帰路に清水集落再訪のため六日町に回った。

4) 10 月 14 日は早朝に虹芝寮を出発し、全員で旧道の出合いより一の倉沢の各登攀ルートを望見した。幸い天候に恵まれ、滝沢への取付点の 2 ルンゼや 1962 年 8 月の OB・山岳部合同の谷川合宿で登った各ルートが確認できた。

2. 行程

10 月 12 日 (土) :

(車組) 09:00:新座駅出発 12:20:谷川岳ロープウェイ乗り場着。電車組と合流。

(電車組) 12:07:上毛高原駅着 12:16:路線バスで谷川岳ロープウェイ乗り場へ向け出発。

13:00:谷川岳ロープウェイ乗り場着。車組と合流。

13:30:谷川岳ロープウェイ乗り場発

14:45:先発隊虹芝寮到着

15:00:第 2 班到着。16:00 第 3 班到着、最終組到着 17:00

21:30:就寝。

13 時過ぎに、予定通り、バス組と合流し、虹芝寮入り。

夜の食事は岩澤コックの味付けした仙台風芋煮を楽しみ、翌日は早いので、21:30 頃に就寝。

10 月 13 日 (日) : 天候は、晴時々曇り

以下の 4 パーティに分かれて行動した。

(1) 白樺沢隊 : 中川、大竹口、岩澤

07:00:虹芝寮発 07:35:湯檜曾川出合 8:15 白樺沢出合着

08:35:白樺沢とケサ丸沢の分岐(遡行開始) 09:30 大滝上

11:45:旧道出合いとなり遡行終了 13:30:虹芝寮着

昨年同様、新道沿いに登り、途中、武能沢から沢に降りて湯檜曾川本流を遡行する。魚止めの滝を

お助けロープを頼りに登り（昨年と同様に登ったが、ロープが少なくなっているためか、昨年より難しく感じられた）、淵を過ぎた辺りから、湯檜曾川本流へ戻り、しばらく歩いて白樺沢出合に到着。その後ケサ丸沢分岐まで小滝が連続する。分岐から白樺沢に懸かる3段30Mの大滝の左側を岩澤君トップで登る。途中、ハーケンを打ってあるところが難しく、多少強引に腕力で登る。

その後は、小滝が連続するが、途中、安全のために、数ヶ所ザイルを出す。旧道と合流する手前の滝は、直登は出来ないで、滝の右側を登るが、草つきがいやらしく、谷に戻ることが出来ないで、そのまま直上して沢を横切る旧道に出合い、遡行終了した。そこから旧道を辿り白樺沢小屋経由で、新道を下って虹芝寮へ向かう。

今回の白樺沢は、昨年遡行したケサ丸沢の下山途中に横切った沢で、終了点から見るとなかなか面白そうな沢と思われたので、今回、遡行するに至ったが、フリーで登れる滝も多く、期待通り、おもしろい沢でした。（大竹日記）

(2) 天神尾根往復隊：前田、東郷、田子

6:15：虹芝寮出発 7:30：ロープウェイ駅着 すでに長蛇の列で45分待ち。

8:37：天神平出発。前日の雨で道はぬかるんでおり、ゆっくりと隊列が動いている。

9:30~40：避難小屋で小休止。歩き始めてすぐに渋滞が始まる。「信号でもあるのか?」と思うほどちょっとした岩場やコブの前では必ず歩みが止まる。途中 田子は体調不良でリタイアする。避難小屋で休んだ後天神平へ引き返す。

11:40：肩の小屋着。ここまで登ってくると新潟県側からの風もきつく、ヤッケを着用する。見上げるトマの耳には人の群れ。頂上も踏まずにオキの耳へ向かう。行きかう人で稜線のあちこちで待機状態が見られる。

12:20 オキの耳で月並みな写真を撮って、岩陰で昼食とする。一の倉沢側は急峻な草付きでズッパリと切れ落ちている。高木先生開拓の滝沢はガスで見えず、嘗て登った本谷や南壁の確認もできない。すっかり記憶にも記録にも付いていけなくなっている自分がそこにいた。

12:50 肩の小屋を後に、どんどん下る。ここでも渋滞に時が流れる。

15:20 天神平ロープウェイ駅。田子と合流。小一時間の待ちで下る。

16:10 ロープウェイ駅出発。旧道を辿る。森の日暮れは早い。旧道下りでラテ使用。

18:00 虹芝寮着。人気の谷川岳コースとはいえ、こんなに渋滞する山歩きは初めてで、疲れの割に、ヤッターという充足感が湧いてこなかった。これもまた勉強。（東郷記）

(3) 蓬峠隊：田中信行（L）、岡市敏治、有馬 誠

紅芝寮6:00→芝倉沢出合7:45~8:45→白樺避難小屋（昼飯）11:15~11:45→蓬峠13:00~13:15→白樺避難小屋14:00→紅芝寮16:30

芝倉沢から中芝新道を経て谷川岳へ至るつもりで、豊田先輩・居谷父娘さんと一行6人で勇躍紅芝寮を出発した。ところが昨日来の雨で芝倉沢が増水していて、中芝新道への取りつきを見つけることが出来ない。試しに北側の小沢を暫く遡行するも行き止まりだった。

田中、岡市、有馬の70代3人組は思案して、蓬峠へ転進することとなった。

旧国道（清水街道）を辿る。振り返ると堅炭岩の岩峰群が真正面に聳えており、中腹は黄葉が進み、素晴らしい眺めを觀賞出来た。

蓬峠（1529m）はなだらかな大草原である。清水峠が間近に迫り、朝日岳や越後の山々が美しい。武能岳（1760m）の熊笹のなだらかな山腹を風が渡っていく。幾重もの波のように熊笹をなびかせて山腹を渡っていく。県境のさわやかな風をうけて武能岳が呼吸しているようだった。

同行の有馬君は大腸ガンの手術以降、排便のコントロールに苦勞している。今回も10時間半の行動中「迷惑をかけてはいけない」とほとんど食事を取らなかった（チョコ2ケとチーズ1片のみ）。

彼は鹿児島島の管工事会社（社員130人）の現役の会長である。リーマンショックで経営が苦しい時もリストラしないで頑張ってきた。

有馬君は体重51Kg、小なりといえども鉄人である。（岡市記）

蓬峠往復紀行追記—巻機山再見—

清水峠から山道（旧国道）を7km下ると清水村がある。この清水村の東側にそびえる美しい山が巻機山

(1960m)である。巻機山は日本百名山の一つで、「機の神様である巻機さんを祀ってあると聞いたことがあるが、昔から魚沼郡では知られた山に違いない。巻機山というやさしい名前と共に、この隠れた美しい山を、私は上越国境中の一名山として挙げたい。」と深田久弥は記している。

この巻機山で1962年の春山合宿(越後三山との分散合宿)があった。そのとき私たちは巻機山頂にテントを張っていた。風の強いある夜、セントエルモの火(St.Elmo's fire)がテントの支柱やエビのしっぽの先端から音をたてて燃えるのを見た。

その夜、今まで経験したことのない激しい烈風に襲われた。テントは切り裂かれ、登山具は吹き飛ばされ、テントにしがみついてまんじりともせず恐怖の一夜を明かした。

夜明けを待って麓の清水村へほうほうの体で逃げ帰ると、なんと高木正孝先生が一本板スキーをはいて、なんの予告もなく清水村へやってきたのだ。私たちは驚喜した。これが本当の“地獄に仏”だと思った。こうして、巻機山は高木先生が参加した最後の現役合宿地となったのである。(先生は、この5ヶ月後、南太平洋上で帰らぬ人となる。)

私は今回、谷川岳の帰りに50年振りに清水村を訪ねてみたいと思って、六日町で途中下車した。昭和37年の春3月、六日町商店街は軒まで雪に埋もれていた。私たちはスキーをつけて一日かけて清水村までボッカしたのだった。

ところで50年後のその商店街は通りも建物も立派になっていたが、店舗の60%のシャッターが閉じたままだった。過疎化が著しいことが分かる。清水村へのバスの便は一日3本しかないことも分かった。これではその日中に往復できなで、清水村行きは断念せざるを得なかった。幸いこの日は快晴で上越線の国境の長いトンネルを抜けて、越後湯沢から六日町までの間、車窓からずっと巻機山とその麓の清水村の眺望を堪能できた。これをもって高木先生を偲ぶ縁(よすが)とした。(岡市記)

(4) 中芝新道隊：虹芝寮から、念願の中芝ルート 豊田寿夫、居谷千春、居谷有里子

6:25 虹芝寮発－6:40 旧道－7:10 芝倉沢出合－8:45 ルート探索後 P 分離

9:00 芝倉沢右岸ルート出発－10:40 堅炭尾根－12:35 一ノ倉岳－14:00 オキの耳－14:15 トマの耳－14:25 肩の小屋－16:20 天神平－17:30 土合口－18:30 発－旧道ルートで 20:00 頃虹芝寮帰着

前日、豊田さんによる「高木正孝、谷川岳滝沢の記録」講演を聞き、むしうに高木正孝先生・渡辺兵力氏が積雪期初登攀された一の倉沢本谷から二ルンゼからザッテル經由滝沢 D ルンゼを登りたかったがそうもいかず。しかし登攀意欲倍増の岡市・田中信・有馬先輩はロープウェイ・天神尾根組から分離して中芝組に合流することになった。旧道に上がり芝倉沢の出会いへ向かった。

実は2008年5月31日、中川・大竹口君と共に雨がちらつく芝倉沢に向かい、残念ながら雪渓途中で退却した。ピッケルアイゼンなく引き返したのか、時間がなく引き返したのか、それとも最初から途中までと決めていったのか記憶にないがあの時、ガスの中の広い雪渓から稜線がかすかに見えたのが随分遠かったように思える。今回はどうしてもこの沢を登りたかった。今回は天気もよく、出会いから見上げた景色は感動的であった。

夏道は左岸沿いと聞いていたし、地図の点線も左岸に打ち込まれているので、あまり右岸に注意をむけなかった。水量も多く簡単にへつることもできないので少し先に抜け道がないか探した。芝倉沢左岸の岩を回り込んだところに、一本の急峻なルンゼが走っており、踏み跡もあったので少し上がってみるがどうやって芝倉沢に行くかを考えるとルートではないだろう。そう判断しているうちに下から有馬さんの笛が鳴った。別にルートがあったとの合図。旧道をさらに上がると支沢があって、すでに田中・岡市・有馬先輩たちが登っている。まあルートではありえないが豊田さんも「まあいいじゃないか」とのこと。これも面白いのでついていったがしばらく行くと荒れた沢になって、戻ることにした。クラシカル遠足も終わりにして「蓬沢組」と「もう一回、芝倉沢ルート探し組」に分けてそれぞれの登山に向かうことにした。本来の豊田・居谷父娘の3人パーティで芝倉沢出合に戻り、今度は右岸を探してみるとすぐにルートが見つかった。思い込みとは恐ろしい。とんだ失態であった。

しばらく右岸を歩くが岩が迫ってきて、左岸に渡ったあと斜面に取り付き高度をかせぐ。道が荒れてジグザグに複数のルートが適当に刻まれている。前方にトラバースで怖くなった夫婦？が更に上へ道を求めているが、ポイントは早く右岸へもどること。沢の中の大きい岩にはペンキの印がみえてくる。

さてジャンプで右岸へもどったあとは、結構それなりに攀じる場面でできて面白くなってきた。



結構、ハードであったがやっと尾根に辿りついてエネルギー補給。右岸の登路が尾根上の中芝新道に交差する付近から幽の沢を見下すと、高木・渡辺パーティが2日目のビバーク中に新雪の表層雪崩に巻き込まれたという左股大滝あたりはすり鉢の底のように見える。南西の方向に幽の沢を越えて目に入る一ノ倉沢滝沢の入口付近(二ルンゼからザッテル)はまさに垂直に立ちあがっている。よくもこんなところを80年前に登ったものだ。

だんだんと風がきつくなってきたが左に堅炭岩を見るこの尾根歩きは楽しい。是非今度はこの堅炭岩稜も歩いてみたいものだ。上をみると草原上になっているこの尾根—国境稜線上で猛吹雪のため道に迷った高木・渡辺パーティが下った道であるが一はなかなか終わらないがやっとの思い出の一の倉岳にたどり着いたのが、芝倉沢取り付きから3時間半もかかったことになる。昭文社の地図では点々ルートで標準時間を書いていない理由がわかった。頂上は強風吹き寒い。なんとかあのカマボコ型超セマ避難小屋で休みたかったが先客あり。ラーメンの匂いがたまらない。豊田さんも靴をやられながらよく頑張られた。まさに尊敬だ。オキの耳・トマの耳の双児峰には刺が生えているように人が群がっているが上空の濃い雲がだんだんと下がり、そろそろ険悪な雰囲気はただよいはじめた。しかしそういう感じの状態でもみるノゾキからの一の倉の岩は素敵であった。湯檜曾川と一の倉沢が十字架となっているのが印象に残っている。

今回の計画は頂上から西黒尾根を下り巖剛新道を降りる計画であったが、スタートが遅れたこと、風がきついこと、視界がなくなってきたこと等でロープウェイコースに変更したが、あゝ、この連休大渋滞を知らなかった不手際よ。ロープウェイ待ちを含めて小屋にたどり着いたのはもう真っ暗な8時頃だった。

さて西黒コースをとっていたらどういふことになったでしょうか。虹芝寮からヘッドランプとホーホイで迎えていただいた皆様に感謝。あたたかいおでんが身に染みた。(居谷記)

10月14日(月):下山

05:30:起床 07:30:虹芝寮前にて記念撮影の後、虹芝寮発(最終組)

09:05:ロープウェイ乗り場着 10:10:湯テルメ谷川着 12:00:湯テルメ谷川発

(車組) 14:00:新座駅に到着。前田氏、豊田氏、中川氏を下ろして解散。

(電車組) 13:05:上毛高原駅着、13:22:上毛高原駅発、東京へ

例年通り、湯テルメ谷川で温泉に入り、解散した。

天候にも恵まれ、楽しい山行であったが、ただ、ロープウェイ及び天神尾根は、山頂の付近が紅葉の見ごろでもあったため、都会並みの混雑となり、長い待ち時間のために、帰りはラテをつけての行動になってしまった。

(次回は、もう少し早い9月中・下旬頃か、芝倉沢を直登出来る5月下旬又は6月上旬の企画がよいのでは)

3. 記念山行総括

ACKUと谷川岳との関係は高木山岳部長時代の昭和30年代後半—1961~62年頃に始まる。その後、1994年6月OB17人が全国から集まり残雪期山行が持たれ、また、関東・関西合同の例会山行として第51回と第95回・107回が実施された。

ただ、残念なことに高木先生が範を示された第2ルンゼから滝沢への登高は勿論のこと、その他のルートからの一ノ倉・幽の沢の登攀も途絶えたままになっている。今回の生誕100年記念行事を契機に先生が半世紀前に同行メンバーに託された言葉を思い起こし、今後のACKUの活動の中でその期待が引継がれることを望みたい。なお、関東の中堅OBを中心として谷川山城の沢登りが行われているが、今回の登山を含めこの分野のACKUの活動を総括し、あわせて次の世代につなげて欲しい。(本項:豊田寿夫記)



虹芝寮内にて歓談



虹芝寮前にて記念撮影